

「混乱」

ヨハネの福音書 7:1～36

1. 悪魔の誘惑

6:70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりには悪魔です。」

6:71 イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた。

7:1 その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである。

7:2 さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。

7:3 そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるように、ここを去ってユダヤに行きなさい。」

7:4 自分から公の場に出たいと思いつつ、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」

7:5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。

イエシュアは、十二弟子のうちの「ひとりには悪魔です」とイスカリオテのユダの裏切りについて言われ、そしてユダヤ人の指導者たちのイエシュアに対する殺意があることが記されています。そしてそれらに付随するかのよう、イエシュアの兄弟たちのことが記されています。「兄弟たちもイエスを信じていなかった」とありますから、このイエシュアの兄弟たちもまた、イスカリオテのユダやユダヤ人たちと同じ立ち位置にあることが示されていると考えられます。7:4 で彼らがイエシュアに言ったこととほとんど同じことを言った存在がいます。

マタイ

4:3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4:4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」

4:5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、

4:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」

これはイエシュアを試みるためにやって来た悪魔、サタンが記されている箇所です。内容そのものとしては違いますが、イエシュアの兄弟たちの言葉と要は同じです。「～しなさい」、つまりイエシュアに対して命令しているのです。イエシュアは御父である神様から遣わされ、御父だけに従う御方です。もしそれ以外のものに従うようなことがあれば、それは御父に対する裏切りとなり、イエシュアを通して行う神様のご計画は失敗とい

うことになります。ですからこのイエシュアの兄弟たちが言った言葉は、神様のご計画の失敗を誘う、まさに悪魔の誘惑だったと考えられます。悪魔はイエシュアの兄弟たちの口を使い、「自分から公の場に出たいと思
いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」
という、いかにもそれらしい、一見正論と思えるような意見でイエシュアを惑わし、自分に従わせようとした
のです。

2. あなたがたの時

7:6 そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつで
も来ているのです。

イエシュアの兄弟たち、すなわちイエシュア信じない者たちに対して「あなたがたの時」はいつでも来ている
と語られました。イエシュアが指し示す「時」はすべて神様のご計画が成就する、完成する「時」を意味して
いると考えるならば、信じない者に与えられる「時」とは、最後のさばきのことであると考えられます。つま
りイエシュアを信じない者には、さばきがすでに決定しているため、「いつでも来ている」と言われたのだと
考えられます。

ヨハネ

3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさば
かれています。

一方、「わたしの時」イエシュアの「時」は、十字架の死に至るまで御父への従順を貫き通し、そして復活し
て初めて決定、完成するものですので、「まだ来ていません」と言われたのだと考えられます。実際にイエシ
ュアが十字架にかかれるのは、この仮庵の祭りから約半年後の過ぎ越しの祭りの時期です。

7:7 世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その
行いが悪いことをあかしするからです。

7:8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちてい
ないからです。」

7:9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

この「時」を待たれる、自分の時を見極めておられるイエシュアの言動の理由は、以下の御言葉にあると考え
られます。

伝道者

3:11 神のなされることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、
神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。

イエシュアの、時にこだわった一連の行動の理由は、これがすべて「神のなされること」すなわち神様の働きで
あることの証明です。そして人にはそれを「見極めることができない」ために混乱していく様子が描かれてい

きます。

3. 内密

7:10 しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にはなく、いわば内密に上って行かれた。

「祭りに上って行きなさい」この祭りは仮庵の祭りです。場所は当然エルサレムです。この祭りの起源は、モーセの時代、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの民が、荒野で40年の放浪生活、すなわち家を建てて定住せず、天幕、仮住まい、仮庵で暮らしたことにあり、過酷な環境にあっても神様の守りがあったことを感謝し、記念する祭りですが、同時にダビデの仮庵、幕屋、すなわちイスラエル王国を建て直すために来られるメシア待望の祭りでもあります。

アモス

9:11 その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。

ですからこの仮庵の祭りはまさにメシアであるイエシュアを迎える祭りなのです。しかし「時がまだ満ちていない」ということ、そして何よりイエシュアは御父である神様以外の命令、悪魔の命令によって行くことなどあり得ません。ですからイエシュアは兄弟たちとエルサレムに上ることをせず、一旦ガリラヤにとどまられました。ところがその後、イエシュアはこっそりと、密かにエルサレムに向かわれます。これはイエシュアの再臨を指し示す行為です。

黙示録

3:3 …わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

まるで盗人のように、まさに人知れずやって来る、それがイエシュアの再臨です。そしてそれはイエシュアさえも知らず、ただ御父だけが知っておられるご計画です。

マタイ

24:36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

7:11 ユダヤ人たちは、祭りのとき、「あの方はどこにおられるのか」と言って、イエスを捜していた。

7:12 そして群衆の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話がされていた。「良い人だ」と言う者もあり、「違う。群衆を惑わしているのだ」と言う者もいた。

7:13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった。

以前イエシュアは「わたしは人の証言を受けない（ヨハネ 5:34）」と語っておられました。イエシュアを証言するものは、以前述べたように、モーセによって与えられた「律法」、そして「御父」である神様と、その

「御子」であるイエシュアご自身です。ユダヤ人の指導者たちも、この時祭りのためにエルサレムに集まっていた群集たちも、イエシュアが「どこにおられるのか」というように、どこにおられ、そしてどこから来られ、どこに行かれるのかを知らず、イエシュアがどのような御方であるのかを知らなかった、正確には知らされなかった、隠されていたことがここに示されています。人は知らないこと、見えないことに恐れを抱きます。この時の群集たちの心理がまさにそうでした。

4. 宮

7:14 しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。

7:15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。」

公ではなく内密に祭りに来られたイエシュアが姿を明らかにします。仮庵の祭りは一週間、七日間に渡って行われますので、祭りの中ごろと言えば三日目、或いは三日後ということになります。「イエシュアが三日目に宮に現れ、語られる」という出来事は、イエシュアが12歳の時にも起こっていました。

ルカ

2:46 そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真ん中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

2:47 聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

2:48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」

2:49 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」

これはイエシュアが12歳の時、両親と共に過ぎ越しの祭りを祝うためにエルサレムに行かれたのですが、行方不明になり、三日目に宮で発見されたという出来事です。その時にもイエシュアはその知識と答えで周囲の大人たちを驚かせていました。そしてその時語られた言葉が重要です。「わたしは必ず自分の父の家にいる」という言葉です。父の家、これは単に宮、神殿というだけでなく、御父の家である神の国、御国を建てるそのご計画をも指しており、そしてそこから決して離れることなく、とどまり続ける、その目的の為だけに生きることを表していると考えられます。だからイエシュアは続いてこのように言われるのです。

7:16 そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」

7:17 だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。

人が家にとどまる、たとえば私が神田という家に生まれ、一生神田家の者として生きていくように、イエシュアは御父の家にとどまる、そのみこころ、すなわち神様のご計画である神の国、御国を建て上げるという目的を成し遂げる為だけに遣わされたです。ですから神様のみこころを求めるなら、それがイエシュアの言動、行動、思考、全存在と全く同じであることが解ります。また逆を言えば神様のみこころ、そのご計画が何である

かを求めない者には、イエシュアのことを理解できないということです。

5. 律法

7:18 自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。

7:19 モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」

7:20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか。」

モーセの「律法」は誰の栄光のためのものでしょうか。誰が褒め称えられ、誰が栄え、誰が得をするためのものでしょうか。私たちはつい誤解をしてしまいます。律法、すなわち聖書に書かれてあることを守れば、自分が幸せになれる、自分が得をします。しかしイエシュアは言われます。真実の律法は、父なる神様の栄光の為にモーセを通して与えられたものであると、そして自分は律法そのものである、つまり神様の栄光の為に生きて働いておられるということです。それを殺す、つまり否定することこそ律法違反であり、神様ではなく、自分の栄光を求めている者である、ということが語られていると考えられます。

7:21 イエスは彼らに答えて言われた。「わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。

「一つのわざ」とは、ヨハネの5章の記述で、安息日の、しかも祭りと重なる安息日に、ベテスダの池に38年も臥せていた人に対し「床を取り上げて歩け」と命じて癒したことを指していると思われまゝ。ユダヤ人たちは、安息日に物を運び出すことは労働の行為であり、安息日の規定に違反する為、律法違反であり、神様を冒瀆する行為だとして、イエシュアを非難しました。それについてのイエシュアの反論が、次に記されています。

7:22 モーセはこのためにあなたがたに割礼を与えました。——ただし、それはモーセから始まったのではなく、父祖たちからです——それで、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。

7:23 もし、人がモーセの律法が破られないようにと、安息日にも割礼を受けるのなら、わたしが安息日に人の全身をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹を立てるのですか。

7:24 うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」

割礼とは、男性の性器の一部を切り取ることを指しますが、血を流す行為であり、医療行為も伴うため、行為としては安息日にはならない行為なのですが、割礼だけは安息日にしても許されていたようです。そもそもこの割礼の起源はモーセの律法からではなく、それよりももっと前、イスラエルの父祖であるアブラハムにあります。

創世記

17:1 アブラムが九十九歳になったとき主はアブラムに現れ、こう仰せられた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。

17:2 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたをおびたしくふや

そう。』

17:3 アブラムは、ひれ伏した。神は彼に告げて仰せられた。

17:4 「わたしは、この、わたしの契約をあなたと結ぶ。あなたは多くの国民の父となる。

17:10 次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。

17:11 あなたがたは、あなたがたの包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたの間の契約のしるしである。

割礼とは、神様とアブラハムの子孫との間に交わされた契約のしるしなのです。つまり割礼を受けるとは、イスラエルの民になる、他の神々を「切り捨て、切り離し」、イスラエルの神である主だけに従うことを意味します。以前述べたように、ベテスダの池とは、偶像の教え、偽りの教えにすがる場所でした。そこに38年もの間縛られていた人を「床を取り上げて歩け」と命じて、イエシュアはその偽りの神々から「切り離した」解放したのです。つまりイエシュアは、これは労働ではない、割礼であると述べられていると考えられます。

そもそも割礼はモーセの律法が与えられる前、アブラハムの時からの命令である為、律法よりも優先順位が上なのです。それならばアブラハムより更に前、天地創造の前からおられたイエシュアの御言葉がいかに優先順位が上かということを理解しなければなりません。つまり律法とその律法をつくられた神様とどちらが上かということです。

6. うわべ

7:25 そこで、エルサレムのある人たちが言った。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。

7:26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。議員たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知ったのだろうか。

7:27 けれども、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが来られるとき、それが、どこからか知っている者はだれもないのだ。」

イエシュアのこれらの言動に、祭りでエルサレムに集まっていた人々は混乱状態に陥ります。その理由が議員たち、すなわちユダヤ人の指導者たちがイエシュアがメシアなのかそうでないのかを明言しないことにあると人々は言っているのですが、要するに人任せです。自分で見極め、判断する知識がないのです。先ほど7:17でイエシュアが言われたように「だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。」つまり誰も神様の御心を行うこと、それが何であるかを理解していなかったということです。そんなユダヤ人の指導者たちとエルサレムの人々とは対照的に、イエシュアは大声で明言して語られます。

7:28 イエスは、宮で教えておられるとき、大声をあげて言われた。「あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです。

7:29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わしたからです。」

先ほどの7:24でイエシュアは「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」と言われました。その通り人々は、うわべではイエシュアを理解していました。すなわちガリラヤのナザレに住む大工ヨセフの息子としてのイエシュアです。しかし実際は7:27で人々が言うように「それが、どこから知っている者はだれもないのだ。」と言っておられるのです。

7. 捕える

7:30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである。

7:31 群衆のうちの多くの者がイエスを信じて言った。「キリストが来られても、この方がしているよりも多くのしるしを行われるだろうか。」

この場面にも人々の混乱している様子がかがえます。人々はまたしても「しるしを行う」イエシュアを、つまりイエシュアのうわべに目をとめています。その理由は「イエスの時がまだ来ていなかった」からだと記されていますが、その「時」とは人々がイエシュアを「捕える」時ですが、ここで使われているヘブル語ターファス(טָפַס)は本来「扱う」という意味の言葉です。

創世記

4:21 その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。

ここで「巧みに奏する」と訳されているのが聖書で最初のターファスです。つまりヘブル的に解釈するならば、「イエスの時」とは人々がイエシュアをターファスする、つまり「正しく扱う、正しく捉える、正しく理解する」という意味と解釈することができます。

7:32 パリサイ人は、群衆がイエスについてこのようなことをひそひそと話しているのを耳にした。それで祭司長、パリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした。

7:33 そこでイエスは言われた。「まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。」

人々が、そしてユダヤ人の指導者たちがイエシュアをターファスする時とは一体いつのことでしょうか。それが起こる為には、まずイエシュアを「遣わした方」すなわち御父のもとに、イエシュアが帰ることが記されています。

7:34 あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」

ユダヤ人たちは、御父のもとに行くことができないことが記されています。それは行く必要がない為です。なぜならイエシュアの方から再びユダヤ人たちのもとに来られる、地上再臨される為です。ここにはそのご計画が暗示されていると考えられます。その時こそがイエシュアがユダヤ人たちにターファス「正しく扱われる、

捉えられる、理解される」時、すなわちメシアとして迎えられる時であると考えられます。

7:35 そこで、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行って、ギリシヤ人を教えるつもりではあるまい。

このユダヤ人たちの「まさか」が後に起こります。ギリシヤ人、すなわち異邦人の中に福音が宣べ伝えられるのです。この事実もまた自分たちこそが、自分たちだけが神様に選ばれた民だと考えているユダヤ人には理解し難いことです。

7:36 『あなたがたはわたしを捜すが、見つからない』、また『わたしのいる所にあなたがたは来ることができない』とあの人が出たこのことばは、どういう意味だろうか。」

このように、メシアについての知識の混乱、イエシュアについての誤解は今日に至るまで続いています。イエシュアが十字架にかけられ死なれ、三日目に復活し、御父のもとに、昇天された現在においても、多くのユダヤ人が未だイエシュアをメシアだと認めてはいません。4:25 でサマリヤの女性が言っていた言葉が思い出されます。

ヨハネ

4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

ユダヤ人が、その指導者たちがイエシュアをメシアと認めるその時こそイエシュアが地上に再臨される時、すなわち神の国、御国がこの地に建てられる時、神様のご計画が完成する時です。そのことが「捕える」と訳されたターファス(טָפַס)というヘブル語の文字の中に表されています。

ターファス(טָפַס)「捕える、扱う」

ターヴ(ט)…しるし、印を象った文字。選び、完成、終わりを意味する。

ペー(פ)…口を象った文字。言葉、食べる、分け前を意味する。

スィーン(ש)…歯を象った文字。噛む、味わう、人間の身体を意味する。

これら三つの文字の意味をあわせると「終わりに言葉を受け取り、味わう人」というメッセージを導き出すことができ、選びの民であるユダヤ人が、神様の御言葉の体現であるイエシュアをターファスする時が終わりの時、すなわち神様のご計画が完成する時であることが表されていると考えることができます。